

氏 名	井 上 正 夫
学位(専攻分野)	博 士 (経 済 学)
学 位 記 番 号	経 博 第 112 号
学位授与の日付	平 成 13 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	経 済 研 学 究 科 理 論 経 済 学 ・ 経 済 史 学 専 攻
学位論文題目	12世紀末期における日本への宋銭流入の問題について

論文調査委員 (主 査) 教 授 本 山 美 彦 教 授 山 本 裕 美 教 授 堀 和 生

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、12世紀末期に日本国内で、外国通貨である「宋銭」が流通しはじめた理由と意義を考察したものである。

本論文前半の第1～3章では、宋銭が流通するようになる以前の12世紀前半には、日本の銅銭が流通していたこと、しかし、次第にその流通が途絶したことの経緯とその理由が論じられている。

本論文後半の第4～6章では、宋銭の発行国である宋、さらに宋の周辺国の遼、高麗といった地域での宋銭流通の状態が分析されている。

第1章では、日本古代の最初の流通通貨である和同銭を、その銀銭の刻印に着目した分析が行われている。刻印の変化と銀銭使用の禁令から、和銅2(西暦709)年8月以降も、政府の禁令にかかわらず、和同銭の銀銭は流通しており、政府はその動向に引きずられる形で、自ら銀銭の偽造すら行った。これは、権力から一定の距離をもった交換社会が存在していたことを示すものであると本論文は指摘している。

第2章は、第1章で論じられた交換社会に対する政府権力の支配力についての検討が行われている。西暦760年代の物価上昇を阻止すべく、政府は旧銭の使用禁止措置を取ったにもかかわらず、旧銭は、ほとんどその措置に影響されることなく、新銭と等価で依然として流通していた。これは、18世紀段階では、通貨に対する政府の支配力には限界があったことを示すものであると本論文は指摘している。

第3章では、10世紀半ばまでに、政府の警察力が首都とその周辺地域に対して強くなり、さらに10世紀末期になると、より強権的な体制が発生したことによって、交換社会が窒息して行ったことが論じられる。市場の窒息は古代銅銭の途絶を意味する。つまり、古代政府の支配力が弱体化したがゆえに、銅銭流通が衰退過程を辿ったと理解する支配的な先行理論に対して、逆に、支配力の拡充こそが途絶の原因であると論じられるのである。

後半の第4章では、宋銭の発行国である宋での銅銭流通が分析されている。先行理論の多くは、宋代の銅銭流通量はつねに不足していたと認識するが、本論文は、物価上昇が持続していた以上、宋銭は過剰気味であったと見なしたほうがよいとしている。

第5章では、遼における銅銭流通を、遼の自国銅銭と外国通貨としての宋銭とを対比し、宋銭が遼国内で10世紀末期から流通しはじめたのに対して、遼の自国銅銭は遼の市場では容易には受容されなかったことが指摘される。こうした状況に対処すべく、遼では政府自ら宋銭の偽造を行ったという。

第6章では、高麗時代の朝鮮半島では、遼とは逆に、宋銭が流通しなかったという史実が説明され、その理由を社会的交換の未発達に求めず、宋麗貿易関係の中で高麗は宋銭を吸収する力が不十分であったという点が指摘される。その上で、高麗の社会では、金属貨幣への需要自体はあったにもかかわらず、自国銅銭は自国銅銭であるがゆえに流通しなかったと説明される。

以上全6章を踏まえた上で、12世紀における東アジアにおける周辺世界で、自国通貨ではなく、外国通貨の宋銭が流通し

たということの根拠は、宋銭が自国の権力者によって発行されたものでないという点、すなわち、宋銭が「自国権力からの中立性」を維持していたという点にあり、日本もその例外ではなかったとの結論が打ち出されている。

これまでの先行理論の多くは、日本において宋銭が信認されたのは、12世紀に入って、日本で金属貨幣への需要が初めて発生したのに、自国金属貨幣の鑄造が間に合わず、やむなく、宋銭流入に依存しなければならなかったからであると説明されている。これに対して、本論文は、金属貨幣に対する社会の理解と需要自体は、古代社会からすでに存在しており、10世紀以来の金属貨幣不足の問題は、日宋貿易、とくに、密貿易によって一定量の銅銭が確保されたために、「偶然」に解決されたが、それが自国銅貨流通にとって置き換えられなかったのは、自国銅貨への不信任のせいであるとの結論を導いている。

論文審査の結果の要旨

本論文全体は、12世紀以前の東アジア世界の銅銭流通に関する支配的な先行理論への批判という姿勢で貫かれている。支配的な先行理論を井上氏は以下の2つに集約する。

(1)銅銭は、より発達した貨幣形態としての銀貨や金貨とは異なり、交換経済が未発達な社会に流通する通貨である。

(2)東アジアの銅銭は、本来的には、流通を前提としない統治手段の一つであった。

こうした2つの通説の根底には、12世紀頃の東アジア世界が、日本も含めて封建社会段階にすら到達しておらず、したがって、金属貨幣流通の素地など存在しなかったという理解があり、これは、西洋的發展段階史観をストレートに東アジアに当てはめただけのものであると井上氏は断定する。

こうした通説に対して、本論文の前半部分(第1～3章)は、日本の古代の通貨状況から考察を開始し、日本では十分に古代通貨が流通していた証左があると、先行理論を否定して行く。日本の古代社会の銅銭の消滅を重視する先行理論は、発見される史料間の齟齬を、政府の矛盾した政策を反映するものであるとしか理解しようとはしなかった。これに対して、本論文は、史料間の齟齬を、政府の政策の矛盾の表現としてではなく、ある時代には、権力から一定の距離をもつポジションを占めえたり、またある時代には、権力そのものに支配されたという、交換社会の揺れを示すものとして、理解しようとしている。

本論文は、交換社会と権力との関係の変化を理解すべく、1つ1つの史料解釈を洗い直し、交換社会の揺れを直視するという、東アジア貨幣史に新たな認識を提供している。本論文は、なによりもこの史料の洗い直し作業において出色であり、本論文の価値はまさにその点にある。

本論文が考察の対象とした地域は、日本、朝鮮半島、遼、北宋である。また、考察する時代は、第1～3章では、8～10世紀である。これは、本論文のタイトルが示す「日本」の「12世紀」という範疇からすれば、考察対象が分散しているように見える。

しかし、こうした構成は、12世紀における宋銭の信認の根拠を探るためには、必要な手法である。すなわち、第1～3章では、12世紀よりはるか古い時代においてすら、日本社会が銅銭の機能について理解していたことを示し、第4～6章では、宋の周辺国の自国銅銭が必ずしも円滑に流通過程に入らなかったにもかかわらず、宋銭のみが流通するという奇妙な事態が、日本も含めた12世紀東アジアの周辺国に共通に見られたことであることの確認から、宋銭流通のもつ特殊「東アジア的」現象の抽出に成功している。

本論文は、古代・中世の東アジアにおける貨幣事情を好事家的に扱ったのではない。東アジア貨幣事情に関する通説批判という形をとりながら、そのじつ、正統派経済学がしばしば陥る誤った貨幣段階説というより大きな論点を内包するものである。多くの正統派的経済学は、貨幣バール観に終始し、貨幣のもつ実物経済への能動的機能をともすれば無視する。これは、正統派経済学の歴史認識が、貨幣なきバーター経済から貨幣を伴う交換経済への移行がどの地域でも歴史的に存在したという単純なものであることに由来する。ポール・サミュエルソンの「貨幣の歴史的諸段階」説はその典型であった。

しかし、経済人類学の成果は、バーター取引の後に、貨幣取引が発生したということ、そもそも純粹のバーター取引なるものがあったという史実自体への疑いを確かなものにした。ハインゾーン&シュタイガー(Heinsohn & Steiger)などは、ボラニーに同調して、「貨幣経済がそこから展開してくるという純粹バーター経済なる観念は、歴史上の臆測以外の何ものでもなく、真実の歴史の歩みに対応していない」と断じ、貨幣の始元を債権・債務関係の確認と継承に求め、ケインズに従

って、計算貨幣が貨幣の原型をなすといった論理を展開した。ポスト・ケインジアンは、貨幣バール観ではなく、貨幣の経済過程に及ぼす能動的機能を重視している。本論文も、そうした貨幣論の新しい潮流に与るものであり、その流れを確かなものにするという貢献をはたしている。

ただし、近代の市場経済における交易と、古代の交換との質的差異を厳密に意識せず、後者を近代市場のアナロジーで、なるべく、権力から遠去からの傾向を示していたかのごとく記述している点は、本論文の重大な瑕疵である。

ポラニーの指摘によれば、古代の交易、とくに、外国人との交換は、市場で価格がつけられるといった現代的な意味での市場取引でなく、一種の戦闘行為のようなものであった。その点では、古代の交易は、政治権力との結びつきがなければ営まれないものであった。交易条件の交渉は、外交上の重要課題であった。「いったん協定が成立すれば、交易条件の交渉は終了した。その後の交易は、交渉で決められた設定価格によって進められた。協定のないところに交易がなかったように、協定の存在は市場行為の不在を意味した」（ポラニー）。

古代の高麗が主力輸出品をもたず、日本が砂金といった重要輸出品をもっていたことが、高麗における宋銭流通のなさ、日本における広範な宋銭流通の存在といった差異をもたらした要因であるとの本論文のいささか単純な区分は、古代の交換を近代市場に引き寄せすぎることからきていると思われる。この点、折角、古代貨幣論への接近に成功したのだから、もう少し、論理を綿密に展開してもらいたかった。

しかし、本論文が、古代中国文で書かれた史料に丹念にあたり、当時の東アジアにおける通貨事情を鮮明に描き切った功績の大きさは否定されるべくもない。

よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成13年4月11日、論文内容と、それに関連した試問を行った結果、合格と認めた。